

T

T

A

K

H23年7月
T・TAK発行

退院後も

つなぎます

あなたの

ところとからだ

東日本大震災兵庫県ボランティア先遣隊に参加して その3

I H I 播磨病院 整形外科 西川 梅 雄

最後に、避難所周辺での被害状況を視察した内容を詳しく述べます。

午後になって少し時間が空いたので、私は一人で仙石線陸前富山駅(せんせきせんりくぜんとみやまえき)付近まで歩いて行きました。写真①は道にあった倒木を整理してあります。道路右側の田畑は塩水が溜まっており、「潮抜き」して淡水化しても、今後数年間は作物ができません。

駅前の郵便局付近に民家が数軒あり、水浸しになった畳や家具が道端に出してありました(写真②)。

道端や空き地に出された瓦礫の山を写真に納めていると、



写真②郵便局付近。畳や家具は捨てるしかない。

どこからともなく「おばあちゃん」が出てきて、私は腕をつかまれました。ひょっとして勝手に写真を撮ったことをとがめられるのか?と思いました。ところが「これは自分の家だから、かまわねえから家の中も(写真を)撮ってくれ!」といわれました。私は呆然として案内されるままに彼女の家の入り口まで行って、写真を撮らせてもらいました(写真③)。

(あんたん)たる気持で「お大事にしてください。」とだけ、小さな声でやっと言えただけでした。



写真①陸前富山駅へ向かう道。倒木で通れなかったようだ。

おうちの中は泥だらけ、畳や家具など一切何もありません。何たる悲しみ。何たる悲惨。私はおばあちゃんの肩に手を乗せて、おきまりのことを言うしかありませんでした。それを言おうとすると彼女から先に「それでも命だけ助かったからまだまだあ・・・。」といわれました。私は暗澹



写真③家主の許可を得て撮った。泥だらけで土間か板の間か分からない。

テレビで被災地の様子をただ見るだけと、直接見るのは大違いでした。そこには「ひと」が生活していた「気配・におい・空気」があったのです。よくテレビで「ひとりじゃないんだ」という言葉を被災者の応援のメッセージに使っていますが、その時の私にはそんな簡単な言葉では応援にも何にもならないと思いました。ただ言葉に出来ないほどの憤り、悲しみ、苦しみ、諸行無常、それでも前向きに生きているお年寄りの力強さ等々が複雑に入り混じった感情が津波のように押し寄せていました。

私はしばらく茫然自失で駅のほうにただトボトボと歩いて行きました。駅はプラットホームが異様に壊れていました(写真④)。私は躊躇(ちゅうちょ)なく線路に飛び降りて歩きました。他に歩くところがないからです。

線路沿いの防波堤が基礎の部分から壊れて持ち上げられ、レールの上に載り上がっていました(写真⑤)。防波堤は幅 100メートル以上破壊されて、砂利や木材、アスファルトなども線路の上にあって、海面が丸見えです。なんと異様な光景でしょうか。その陸側の山の斜面はがけ崩れの跡がありました。足元は泥だらけ。周囲は全く静かで物音ひとつしません。私はこのへんで終わりにしようと思い、避難所へ引き返しました。今思えばこの時、二次災害のことは全く頭の中にありませんでした。もし余震があって小さな津波でも来ていたら、この文章を書いている「私」は存在しません。

手樽地区避難所に帰り予定通りの活動を終わりました。午後5時帰りのバスが来ました。たった1日の活動で、私はたいした事も出来ませんでした。避難所の方々はバスから見えなくなるまで、総出で手を振って見送ってくれました。私もずっと手を振っていました。さようなら松島手樽地区の人たち、さようなら松島、また来る日まで……。私は立派に復興を果たした松島に、また行きたいと思います……。

私はこのようなボランティア活動は初めてで、あちこちでご迷惑ばかりかけたような気がしますが、大変貴重な経験をさせて頂きました。このような機会を与えて頂いた兵庫県医師会、当院関係各位に感謝申し上げます。

最後に被災地の皆様のご健康と、一日も早い復興を心からお祈り申し上げます。
合 掌。



写真④プラットホームがブロックごとにはがされている。



写真⑤仙石線陸前富山駅付近。線路の上にもいろんなものが載っている。線路自体も沈んだのか？

TTAK新聞のバックナンバーは

播磨病院ホームページ <http://www.harima-hp.jp/> からご覧になれます。